

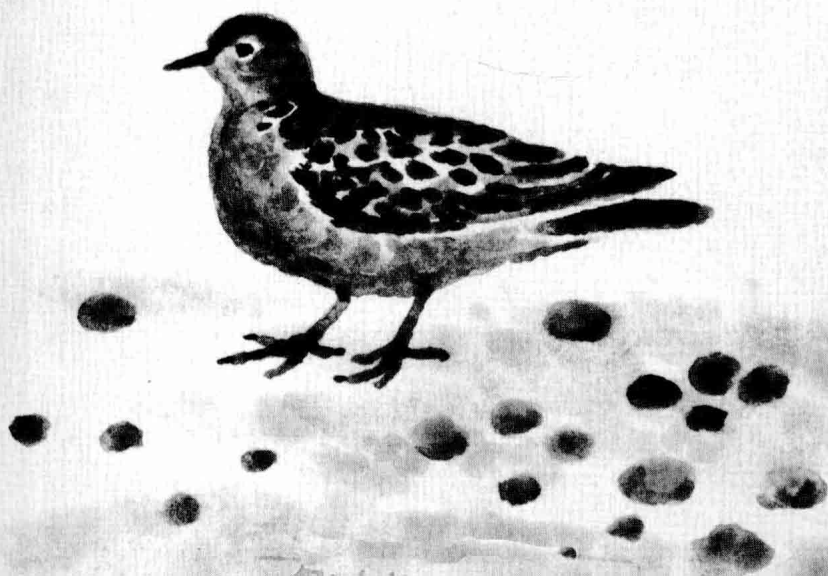
# 嗟峨我野物語

阿部牧郎



# 嗟峨野物語

阿部牧郎



嵯峨野物語

（書下ろし  
長篇小説）

奥付

昭和五十八年八月五日 第一刷

著者 阿部牧郎 あべ まさお

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二

電話東京（〇三）二六五局一二二一

定価 一、二〇〇円

印刷 大日本印刷 製本 大日製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

書下ろし  
長篇小説

# 嵯峨野物語

阿部牧郎

装帧  
掘越保二

# 1

ホームのはずれにくすんだ二輛の客車が停まっていた。やがて到着する就職列車に連結される車輛だった。

まえの車輛は男子用、うしろのは女子用だった。この春中学を出た少年少女、高校を出た若者たちがすでに車輛へ乗りこんでいた。少年たちは丸坊主で、学生服をきていた。少女たちもまだ化粧の気もないセーラー服姿である。高校出の若者たちは背広やジャンパーをきて、頭髪はのばしたてのオールバックや七三だった。高校出の女の子はいない。わざわざ大都会へ出てゆかなくとも、地元の小城町や近くの佐賀市に就職口があるからだった。座席はちょうど満員である。ホーム側の席にすわった者は、窓越しに見送りの親きょうだいと話をし、向う側の席の者はホームへおりて親きょうだいとわかれを惜しんでいる。

はやくも弁当と茶を買う者がいた。泣いている少女や母親がいた。幼い子供をつれた母親の送り人が多かった。高校や中学の教師たちが昂奮して大声をあげながら、生徒たちと握手してまわっている。一般列車の発着時刻ではないので、ホームの中央部や後方はがらんとしていた。就職列車の車輛のそばの一带だけが笑顔と泣き顔で混みあっている。惜別の紙テープを教師の一人がくばっていた。少年少女の日ななくさい服の匂いと、母親たちの衣服のなまぐさい生活臭が、駅特有の鉄と油の匂いをおしのけていた。

武上春恵はまえの車輛の中央部のそばに立っていた。車輛の窓の内側には一人息子の繁が照れくさそうにすわっている。繁は新しい紺の背広の上衣を大事そうに網棚へ乗せ、ワイシャツに赤いネクタイをしていた。慎太郎刈りがやつと板についたところである。繁はこの春高校を出て、十名ばかりの仲間とともに東京の製菓メーカーへ就職するのだ。すでに五月のはじめである。企業側のうけいれ準備がととのわなくて、きょうまで自宅で待機してきた。東京では会社の寮へ入る予定だった。会社からつきそいの人もきている。なに一つ心配はない。繁と話すべきことはすべて話し終っていた。女手ひとつで育てた息子がこうして巣立ってゆくことに、人なみの感慨がないとはいえない。だが、過去現在を美化して感傷におぼれるたちではないので、目にいっぱい涙をためて息子に見惚れるという工合にはならない。息子がやつと一人前になったというよろこびのほうが大きかった。列車が出てゆくまでの間がもてなくて春恵はすこし苛立っていた。繁とわかれるのは、もちろんさびしい。だが、ここまでできた以上、はやく出発の時刻になればよいとも思う。

構内にアナウンスがながれた。就職列車がまもなく到着するとの知らせである。母親たちの声が急に高くあわただしくなった。

「母ちゃん、おいは心配いらんけ、お祖父ちゃんば大事にしさんね」

繁が身乗りだして話しかけてきた。

人まえでは母とめったに口をきかない息子である。きょうは春恵がよそゆきの淡いブルーのスーツをきているので、待遇がいいのだらう。いや、やはり別離の情なのだらうか。

「わかつとるばい。あんたも祖父ちゃんにちゃんと手紙ば出さんね。母ちゃんよりか繁の手紙のほうに祖父ちゃんにはうれしかとよ。どがんいうても繁は祖父ちゃん子やけん」

「母ちゃん、手帖とか米穀通帳とか、ちゃんと荷物にいれてくれたとかね。気楽トンボだけんねえ。そうだ判コ。判コわすれとらんとか」

「わすれとらんよ。そのうち東京へたずねていくけんね。いつ訪問されてもいいように、部屋をきちんとしとかとだめとよ」

「おいの住所と電話番号、ちゃんと書いとつとね。お茶会で茶碗ば割らんようにせんといけんばい。高い茶碗よう割るんじゃけん」

「まあまあ先生のところ、どっちがお母さんかわからんですね。繁さんは、ほんにしっかりしとらすけんね」

そばにいた繁の仲間の母親が笑った。

武上春恵は実家の農業を手つだいながら、近所の娘にお茶と生け花を教えてきた。だから、知合いの人には先生と呼ばれる。若いころはそう呼ばれるとうれしかったが、三十九歳になるいまでは気が重い。いかにも老けた感じをうける。それに茶道においても花道においても、自分がまだほんの初心者にすぎないという意識がある。

やがて就職列車がホームへ入ってきた。四輦の客車に繁とおなじような若者や少年少女が乗っている。酸っぱい刺戟臭のある石炭の煙のもとで、繁たちの乗った二輦の連結が終った。教師たちの音頭でバンザイの声が湧きおこった。列車がゆっくり動きだした。たくさんの紙テープが切



れてとんだ。ハンカチやスカーフを人々は振りはじめた。

照れくさそうな表情で繁はかるく手をふった。春恵は列車についてあるきながら、「元気にしとらんば、繁。へこたれたらだめばい」

と、思わず大声でさけんでいた。自分でもあきれほどのよく透る声だった。

涙があふれてきた。意外だった。遠のいてゆく繁の笑顔に、昭和二十年の一月に戦死した夫の清一の面影がかさなりあつたからである。夫の死はもう十四年もまえのことだ。めったに思いだしもしなかった。ふだんの繁に夫ゆずりの表情や気性をみいだす習慣も春恵にはなかった。夫が戦地へいったあと、夫とは関係なしに繁が勝手に腹から出てきたように感じていた。だが、いま東京へ向かう繁の顔は、夫の清一に生きうつしだった。目鼻立ちが似ているわけでもないのに、そっくりだった。みるみるそれは遠ざかり、涙でぼやけた春景色のなかへ消えていった。心の底に住みついていた清一が、繁といっしょに東京へ去ったのかもしれない。

春恵はすぐにわれにかえった。人に気づかれぬよう、涙をふいた。いままで列車にかくれていた駅の近くの民家の鯉のぼりが、尾をひるがえして、あざやかに目に映った。悲しみの奥からあかるい感情がこみあげてくる。見送りの人々といっしょに改札口を出て、何人かの知合いに挨拶してわかれた。

——バスに乗って自宅へ向かった。座席が空いているのに、腰かける気がしなかった。体がかかる。窓から流れこむ五月の風を、春恵は大きく吸いこんだ。澄んだ風がのどにしみた。声に出さないうでハミングしていた。心が浮き立っている。そのことに気づいて、びっくりした。一人息子とわかれて陽気になる母親があるものだろうか。こんなに浮き浮きして、あまりに不謹慎ではないのか。

だが、手足をいっぱいのばして、大声でもあげたい気分なのは事実だった。解放感で春恵は

いっばいになつていた。もう繁に拘束される必要はない。つねに繁を念頭において行動しなければならぬ時期はすぎた。だれにも気がねしなくてよい。好きなことができるのだ。肩の重荷をおろして、春恵はのびのびしていた。これまでとくに繁を重荷だと感じたことはない。だが、おろしてみると、繁の存在がどんなに重く自分のしかかつていたかがわかつた。繁は元気で巣立っていった。もう春恵は自由である。住みたいところに住み、たのしみたいことをたのしめる。これまで繁のために生きた。これからは自分のために生きられる。そうしようと春恵は思った。若葉のあざやかな故郷の山の向うに、ひろい世界のひろがる気配があつた。漠然とあこがれて自分のための人生が、とつぜん目のまえにひらけた思いだつた。

家のそばで春恵はバスをおりた。家を出よう、と決心していた。一人で京都へいく。お茶と生け花の勉強のため、以前から京都へ出たいと思つていた。だが、日々の暮しに手をとられて、ほんの近在への一泊旅行さえままにならずにきた。いまこそ念願をはたすときだ。家を出て、京都に住んでみたい。もちろん暮しの心配はある。だが、自分ひとり、たべるだけならなんとでもなる。自分のめんどうさえみればよいのだから、気はらくだつた。思い立つと、矢も楯もたまらなくなつた。家の玄関の戸をあけて、春恵は大声で母を呼んだ。父母も弟も田圃へ出て留守だつた。弟の嫁が一人家にのこつて、とれたばかりの蓮根を台所で洗つていた。

春恵は義妹のそばへいった。血のつながりがないだけ、かえつて大事な話をしやすい相手だつた。計画を春恵は打ちあけた。義妹はおどろいて家事の手をとめた。何度も訊きかえして、困惑した表情になつた。

「そがん、義姉さん。なんもいまからよその土地で苦勞せんでもよかでしょうが。女一人でどがんでたべていくとね」

「どがんかなるやろ。それに、いつまでもここに厄介になつとも心苦しかでしょうが。息子が一

人まえになった以上、私も負けとかれんけんね。京都へいくけん」

「あんたの生れた家で、なんが心苦しかとね。そがん、どがんしても出るいうとならば、仕方なかことだけどねえ」

義妹は困惑の表情のままだった。春恵が出てゆくのに大賛成の本心を顔にだすまいとして懸命である。気の毒なくらいだ。

話を終って春恵は自室へひきあげた。荷物をつくる算段をする。すてるにしのびないものなにつない身の上が、いまは幸福に感じられた。お茶とお花の生徒たちの家を一軒ずつ訪問して、教室の打切りを詫びなければならぬ。それだけがめんどろである。

夕食の卓を一家でかこんだとき、父母も弟もすでに春恵の意向を義妹からきかされていた。みんな春恵の無謀をたしなめた。父がいちばんつよく反対した。だが、春恵の決心が固いのを知ると、不機嫌にだまりこんだ。

「仕方んなかね、父ちゃん。姉ちゃんがこがにいわすけん、好きなようにさせんですか。もう子供じゃなか。わが身のしまつぐらい、一人でつけらすでしよう」

「そがんばい。もし困つたら、家へ帰ってくればよかでしょうが。春恵にすれば、ここでは気づまりなことあやろし、あんまりとめつともかわいそうかもしれんよ」

やがて弟と母がそういいだした。

話はそれでついた。うまくいきやええがのう。父もそうつぶやいた。みんな春恵の身を案じながら、心の底でほつとしていた。大きな家ではなかった。春恵と繁が寝起きしていた六畳間には、春恵の出たあと、中学生の甥がすぐ入居するのだろう。

一週間後の朝の十時、春恵はひとりで小城駅の待合室へ入った。ビニール皮革の大きなポストンバッグを手にもっていた。

ベンチに腰かけてしばらく待った。繁を送ったときとおなじ淡いブルーのスーツを着ていた。京都ゆきの切符は三日まえに買つてある。知つた顔には出会わなかった。時間がきて改札口を通り、ホームへ出た。佐賀で東京ゆきの急行に乗り換え、京都へ向かうつもりである。繁のあとをたどるようにして、山陽線を東へのぼるわけだ。春恵は小柄な体を反らせるようにして駅の向うをながめた。みんなが働きに出たあとで、小城の町はしずかだった。碧色がかった遠い山なみを背景に、家々の屋根がねむそうにひしめきあっていた。ゆつくりとバスが道路を走り、近くの畑で農夫が鍬をふるっている。野良着姿の女たちが籠や石油缶を背負つて声高にしゃべりながら駅まえをあるいていた。用事で町へ出てきた近在の農夫らしい男たちが、対照的にだまりこくつてゆききしている。

いつまたこの風景を目にするのかわからない。格別の感傷もなく、春恵は故郷の野山をながめた。駅まで送ろうという母や義妹の申し出をしりぞけて家を出てきた。飛び立とうとする鳥のように自分を感じていた。前途のことしか頭にない。困つたらいつでも帰つてこいと何度も母はいつてくれた。なにがあつても帰る気はなかった。人の目がいつもどこかで光り、噂話が朝から晩まで木々のさやぎのようにきこえる田舎町。よくも長年ここで暮してきたものだと思ふ。春恵は思ふ。旅立ちのときになって、田舎暮らしの窮屈さ、息苦しさが身にしてみた。それを意識するまいと、知らず知らずいままですとめていたのだらう。

やがて列車が到着した。大きなボストンバッグをさげて春恵は乗りこみ、すみの座席に腰をおろした。すぐに列車は出発した。みなれた野山の風景がゆつくり後方へ動きだすと、春恵の解放感はんものになった。

ほうほうにある菜の花畑が、黄色い羽となつてうしろへ飛んだ。白や黄色の蝶の群れが散乱した。田植えまえの黒っぽい田が、うねりながら流れ去った。農夫や牛も飛んでいった。午後二時

だった。車輪がレールの継ぎ目にあたる規則ただしい音とともに、少女のように体がはずんだ。双つの乳房が急に大きくなったような気になる。小城の町が視界から消えた。車内をみまわしたが、相変らず知った顔は一つもなかった。

向かいあわせの座席には、役場の吏員といった風采の中年男が腰をおろしていた。眼鏡の奥で眉をひそめ、男は新聞を読んでいる。春恵は男に話しかけたくてむずむずした。私、いまから京都へいくよ、といってやりたい。だが、男は平凡で実直そうな顔をしている。話がもう相手とは思えない。春恵はそこで、男の妻のことを考えた。家の掃除をして、洗濯をして、買物籠をさげて重々しい足どりで市場へ買い物にゆく主婦。家計をやりくりし、子供を叱り、近所の主婦とのおしゃべりだけが生甲斐である春恵とおなじ年ごろの女。戦争未亡人はあっちの方面がつかろうね。二言目には春恵にそういった近所の中年の主婦の、歯ぐきをむきだした笑顔が脳裡によみがえった。

うわあ、いややね。辛抱でぎんけんね。向かいあわせの中年男をもう一度ながめて春恵は身ぶるいした。夫の清一が生きていれば、この男とおなじ年輩だろう。春恵もいま思い描いた男の妻と似たりよつたりの暮しをしていたはずである。身一つの現在が、あらためて倅せに感じられる。はやく夫を亡くしたことを、むかしは不幸だと思ったが、いまは反対の心境になった。清一にはやはり済まないと思う。が、本音は本音である。

二十分ばかりで佐賀へ着いた。東京ゆきの急行には、一時間の待ちあわせだった。春恵はホームのベンチで時間待ちした。自由席の切符しかもっていない。乗客がホームにあらわれると、春恵はすぐに立って、行列の先頭で座席の奪い合いにそなえた。

予定どおり急行列車に乗りこんだ。四人掛けの座席の一つにありついて、春恵はほっと息をついた。列車が動きだすと、自分と故郷をつないでいた目にみえない糸が完全に消えた実感があつ

た。安堵の念が深くなった。心の底に、ほんのかすかにだが、出立をためらう気持があったようだ。もうあともどりはできない。いろんな思い出のある佐賀の街を、会心の思いで春恵はながめた。同時に、どこか敵地へおもむくような緊張が生れて、油断のない表情になっていた。

「どこまでいかすですか」

向かいあわせの男が話しかけてきた。商人らしい四十前後の男である。

窓ぎわには夫婦らしい初老の男女が向かいあって腰かけていた。夫のほうが春恵の右どなりにいる。本を読んでいた。

京都まで、と切口上に春恵はこたえた。商人らしいその男の視線が、襟もとやスカートにわずらわしくからみついてくる。

「わあ、京都ね。観光ですか。いまは時期がよかですけん、きれいかろうね。よか身分ばしとらすな。お一人ですか」

京都はどちらへいかれます。やはり金閣、銀閣や清水さんですかと男はうるさい。この調子でからまれては、夜になっても、大きな口をあけて眠るわけにもいかないだろう。

「観光ではなかとです。お茶は勉強にいくとです。淡交社の会員ですけんね」

「ああ、お茶の先生ですか。なるほど」

商人らしい男は、思ったとおり、つぎの言葉が出なくなった。茶道などにはいちばん縁のない人物なのだ。淡交社の会員でありながら、これまで京都の茶会へ出席するひまがなかった。その事情を説明する手間はふけたのありがたい。

春恵はバッグのポケットから文庫本をとりだして読みはじめた。井伏鱒二の「本日休診」だった。商人らしい男は完全に話のつぎ穂をなくして、無然として外をながめた。男は靴をぬぎ、足をのばして春恵のひざの横へおきにくる。靴下がかすかに汗くさかった。春恵は顔をしかめたが、

このくらいの無作法はゆるしてやらねば、と思いかえした。自分ももう娘ではない、数えて四十のおばさんなのだ。あからさまに他人と角突きあって、息苦しい目にあうのはよそうと考へたりする。

夕方になり、夜になった。列車は山陽本線を走っていた。男はほとんど話しかけてこない。四合瓶の日本酒を飲んでいた。春恵はたっぷり本を読み、弁当をたべた。眠くなったので、顔にハンカチをかけて目をつぶった。男の足がときおり春恵の足にさわった。わずらわしかったが、やがて気にならなくなった。繁の夢をみた。小学校のころ、山へあそびにいったきり夜になっても帰らないので、大さわぎしたことがある。そのときの夢だった。母親をわざと困らせようとし、るんじゃ、と弟にいわれて悲しかった。十時になって、繁はけろりとして帰ってきた。あそび疲れて、消防自動車の車庫のなかで眠りこんでいたということだった。

夜があけた。まわりの人はまだ眠っていたが、洗面所へいって顔を洗った。明石から神戸にかけて、海をながめながら牛乳を飲み、蜜柑をたべた。ビルや住宅が平地から山腹をぎっしり埋める神戸の街をながめると、見も知らぬ無数の人々の暮しの堆積をみるような気がした。大都会へいま自分ももぐりこもうとしている。無数の人々の一員になる。どんな暮しが待っているのだろう。わるいようにはなるまいと思う。繁のいったとおり、生来の気楽トンボである。京都にあこがれる女に、京都の人々が冷たいわけはないと信じていた。

大阪へ着いた。はやばやと春恵はおける支度をはじめた。切符と財布を何度もたしかめた。京都までの一時間たらずが三時間にも感じられて、胸が焦げるようだった。

お世話になりました。列車がホームへ入ってから、となりの夫婦と正面の男へ挨拶した。現金なほど愛想よい笑顔になった。ポストンバッグをさげて列車をおりた。駅の正面へ出ると、小さな赤い市電が目に入った。京都は晴れていた。立ちならぶ土産物店のほうから八ツ橋の香りがな

がれてくるようだった。

ゆくあてはない。宿もきまっていない。右京区の御室に友達が一人いる。おなじ佐賀県出身の、村松みよ子という高校教師夫人である。ほんとうはみよ子の家に一週間ばかり厄介になってその間に下宿をさがすつもりだった。小城の郵便局から電話をかけて、了解をとりつけてあった。ところが出発の前日、みよ子から電報がとどいた。急に夫の客が四、五日滞在することになった、上洛を一週間延期されたしといってきたのだ。もう切符を買ったあとだった。騎虎の勢いで春恵は予定どおり小城を発ったのである。市電の駅で地図をみて、まず嵐山へゆくことにした。京都には娘時代に一度だけきたことがある。よく知られた名所旧蹟の多い市街地よりも嵐山、嵯峨野方面の風景に心魅かれるものを感じた。大堰川と渡月橋周辺の景色がいちばん記憶にのこっている。とりあえずあのあたりへいって、京都へきた気分ひたろうと春恵は思った。

小さな赤い市電でなく、黄と緑の二色に塗られた市電に揺られて四条大宮へ出た。そこから嵐山電車に乗りかえた。古い、味わい深いたたずまいの町なみが車窓の外をながれるのに、市電でも嵐電でも、乗客はぼんやりした顔で車輛の揺れに身をまかせていた。娘たちの話すやわらかな京言葉が耳についた。お茶や生け花の心得のある娘たちばかりのような気がする。女の乗客の服装は、思ったより華美ではなかった。鯉のぼりを泳がせている家々の割合が、小城の町の二倍はある、と春恵は窓の外をみて思った。

嵐山へ着いた。駅を出て、通りを大堰川のほうへあるいていった。土産物店、食堂、菓子店などが左右にならんでいる。高い建物はない。団体の観光客や遠足の子供たちがゆききする。通りがひろいので、混みあっている感じはなかった。鋪道に靴がかるやかに鳴った。重いポストンバッグをさげているのに、足がしげんに跳ねるようだった。

河のそばへ出た。ひろびろとした風景がひらけた。巨大な渡月橋が力づくよく東西の岸をつない



でいる。澄んだ流れにボートがうかび、上流には屋形船がただよっていた。中之島の松の緑が疲れた目にしみこんだ。小倉山から岩田山あたりへつづく山なみが、まるで大きな鷲のように丸く、おちついた緑色をしている。ふもとに寺や料理屋らしい、くすんだ屋根がちらついていた。中之島の松の下や、ながい堤防を人々がぶらついている。上流の対岸の山は流れに接していて、木々や岩が、緑がかった水とあざやかに対照しあっていた。にぎやかな、有名な貴族たちが愛したのとほとんどおなじたらずまいなのだろう。はるばるきた甲斐があつたと春恵は思う。河風になびく髪をおさえて、目をほそくして風景に酔った。全身が風景に溶けこんでゆく心地である。

とつぜん右手でブオーという大きな、異様な音がきこえた。びっくりして春恵はふりかえつた。修験者の装束をきた男が、渡月橋のそばのうどん屋のまえに立って法螺貝を吹き鳴らしている。門付けなのだろう。しばらくして、店内からはつぴをきた男が出てきた。修験者へ小銭をわたした。ていねいに一礼して修験者はつぎの土産物店へ移った。

なんとなく春恵はうれしくなった。うどん屋は混んでいる。いそがしいさなか、わざわざ外へ出て門付けに応じるあたり、さすが京都だという気がした。春恵はうどん屋へ入った。ひろい土間に三十組ばかりのテーブルをおいた大きな店だった。店の横手が菓子店になっている。桜餅を売っていた。

きつねうどんを春恵はたべた。おどろくほど美味かった。空腹だったので、いそいでたべた。終ると体が汗ばんできた。夜汽車の疲れがいまになって出てくる。手足が重かった。重いバッグをさげて、観光めぐりをするのもつらい。宿をきめようと春恵は思った。立ち働く老婆を呼んで、このへんに安い旅館はないかと訊いてみる。

「旅館ですか。へえ、そら嵐山にはぎょうさんおすけどなあ」